

## 【現代語訳編】

### 一 『宇田友四郎翁』より

## 土佐中学校の設立

### 一 その出発点

富を利用する難しさは、富を獲得する難しさよりも難しい。白洋汽船によって、数百万円の巨富を致した宇田翁は、その富を如何に利用すべきかについて、いろいろ考えたであろう事を推察する、その中において、翁の脳底に、学校設立の胚芽があつたかどうか。横山又吉氏が市商を隠退した時、同氏を校長とする簡易商業学校設立の意思が翁の心中に動いていたという事が事実とするならば、後進子弟の教育に決して無関心ではなかつたという断定を生むわけだが、無から有は生じないから 商業教育の胚芽が、他の勧めを受けて、英才教育の若葉に変わったとの観測は、当たらずとも遠からずではないかとも思われる。白洋汽船（宇田翁が経営、第一次世界大戦中のブームで巨利）で大いに儲かつたのは翁一人でなく、川崎幾三郎氏ならびに他の株主も皆な富屋を潤した連中である。この黄金風景を眺めて、その富の一部を世のために割愛させたいと思案したのが、名市長藤崎朋之氏であつた。翁と藤崎氏とは俺お前と呼び合う間柄で、平素翁の「財」に対する観念をよく理解した氏は、「富んで之を楽しく使用せざる人は猶ほ黄金を運ぶ驢馬の薊」（粗

食)を食ふがごとし」との金言を親友のために活かしたいと考え、ある日助役川島正件氏にその話をした。話の要点は、この際翁と川崎氏とに金を出させておきたいというのであり、それが発端となって、川島氏および視学(教育監察官)西山庸平、市会議員池本浩静三氏が、市長の意思を体しての会合となった。三氏はいずれも教育に一家の見識を備えた人物であり、その意見が期せずして合致するものである事を藤崎氏は知っていた。そして宇田翁が君子三樂の一つ



藤崎朋之氏

「心に恥ずる所無き」立派な人物であることは、早くからその認めるところであると同時に、天下の英才を得てこれを養成する楽しみも、話せば解かる人であることを頭に置いていたものだから、右の三人会はしばしば相集まり、繰り返し協議を重ねた結果、英才教育のために資金を出させるのが最も有意義だとの結論に到達したので、早速この三人会において予算私案を作り、第一案百万円、第二案八十万円、第三案六十万円と三通りの膳立てが出来た。これが、そもそも土佐中学校創立の発端である。

## 二 翁が生みの親

三人会で、三段構えの予算が出来たとはいえ、未だ肝腎の本人には会っていない。思うに三人会の腹案は、先ず三人が手を携えて宇田翁に会い、打診の結果、有望の見込みが付いたならば、これを在京の先輩北川信のぶより従氏に持ち込み、同

氏より翁に切り出してもらう段取りであつた。北川氏は司法官畑の人で、長崎地方裁判所検事正を辞めると、すぐ長崎市長に選ばれて就職、のち栃木、新潟の知事に任ぜられ、官界を退いてからは、東京芝区三田小山町に悠々閑日月を楽しんでいた。北川氏と翁との交際は随分ふるく、大阪、広島あたりの司法官時代から、ずっと相識っていた本統の友人関係で「北川！宇田！」と互に呼び切りにする親しさであつた。そして北川氏と藤崎氏とは極めて如才の無い肝胆相照らず、至誠相許す間柄であつた。かくの如き好縁の蔓を握っておる発起人組は、一日相伴つて金的を射とめるべく宇田翁を訪ね「非常な御成功の御様子に承りますが、何か一つ県のために金を出されては如何ですか」との伏線網を敷いたところ、翁は言下に、そして快濶に「出してもよい」と共感の意思を表明し、一行を満足させたのである。ここにおいて三発起人は、高根の花に手の届いたような歓びに浸りつつ、早速予定のコースを踏んで、在京の北川氏へそれを持ち込んだ。アマノジャコ（アマノジャク、ひねくれ者）を床の置物にする北川氏は、容易に他人の言をそのまま受け納れる人ではない。三人から数回手紙を出しても、それが物になるかといった調子で、中々御輿を上げようとはせぬ。いよいよアマノジャコぞというので、三人は必死となり、この通り手形を取っておるからとて、最後の手紙を示し、やっと来県してもらい北川氏と発起人側との第一回の会見が公園花月亭に於いて行われた。その時発起人側の第一印象は、うかと百万円だの、八十万円だのと言ったら、その場でアマノジャコの本領をむき出して逆襲される危機を予感したので、予算額を最小限度の六十万円として北川氏に持ち出した。その程度なら応ぜぬことはあるまいと、北川氏から更に宇田

翁に持ち出した。翁は藤崎市長の見抜いた通り、人材養成には双手を挙げて賛成した。しかもその賛成が、我が意を得たりという喜色満面の賛成ぶりで、翁一人で百万円でも投げ出しかねない勢いであった。けれども謙虚にして、義理と人情とに重きを置く翁は、事業を共にし、儲かりを共にしておる盟友川崎氏の身の上をも考えた。そして子孫の無い川崎氏はこの教育事業へ金を出しておくことが、自己を永遠に生かす所以（わけ）となる、だから宇田一人の事業とせず、二人共同の事業にするという趣旨を以て、川崎氏を同意せしめたものと思われる。川崎氏を誘ったのは。寄付行為を折半というような思惑からでは決してなかった。実際その時の翁の共鳴ぶりは素晴らしいもので、百万円眼中に無しの概（おもむき）があつた。だから北川氏が乗り込んで、二三時間の間に話はスラスラと進行し、「川崎宇田財団法人寄附行爲」の決定となり、大正九年二月を以て許可された。この経過が証明する如く、藤崎名市長の発意あり、北川信從氏の斡旋ありと雖（いへど）も、相手方が宇田翁でなかったならば、この事業は断じて成立しない筈（はず）のものだ。事實は最善の雄弁である。土佐中学校の生みの親が、翁であることは多言を要しない。

### 三 所謂人材教育

土佐中学校は、国家有為の人材を養成することがその目的で、設立趣意書に本校は大戦後国運の進展に伴う中等学校内容充実の趣旨により設立せられたるものにして中学校令の示す所に拠り、中堅国民の養成を目的とするは論をまたざ

れども亦た一面高等教育を受くるに十分なる基礎教育に力を致し修業後は進んで上級学校に向かい他日国家の翹望<sup>きやうぼう</sup>する人士の輩出を期するものなりとある通り、縣下の秀才を一堂に集めて「高等教育を受くるに十分なる基礎教育に力を致す事」と「國家の翹望する人士の輩出を期する事」の二つがその最大眼目となっている訳で、ここに他の中等学校と大いに趣を異にする特色を持つておることを知らねばならぬ。同校の「沿革概要」中に

故川崎幾三郎及び宇田友四郎の両氏は、夙<sup>むと</sup>に（早くから）県下の為に私財を投じて公共的事業を經營せんとするの意あり、大正七、八年の頃、豫<sup>かね</sup>て昵懇<sup>じつこん</sup>なる北川信從氏に、その事案の選択を委嘱せり、爾来<sup>じらい</sup>北川氏は審思熟慮、永久に且つ普遍的に両氏の素志を貫徹するは、教育事業に如くはなしと断じ、之<sup>こ</sup>れを両氏に通ぜしが、両氏亦た大<sup>おお</sup>に之れを賛し、その資金六十万円を提供し、十万円を設備費とし五十万円を基本金とする財団法人として之れを管理し、予科（中学進学の予備クラス）を付設する中学校を設立することを協定せり。

かくのごとき記事は、土佐中の特色と、その沿革とを一層明白ならしめておる。

#### 四 校長の人選

土佐中学校の母体が宇田翁であり、その産婆役が翁の親友北川信從氏である関係において、校長の選択は当然北川氏



三根圓次郎氏

の裁量に一任すべき筋合いとなつて来た。発起人の川島正件、池本浩静両氏は、英才教育の主張者たる同志西山庸平氏を校長としたい意見を持っていた。しかるに北川氏は、中学校の教育に経験の無い西山氏では何だか物足りないからと、いうので、新潟県立中学校長三根圓次郎氏に白羽の矢を立て、宇田翁の同意を求め、同氏を招聘することに決定した。思うに北川氏は新潟県知事時代に、三根氏の人物、識見、手腕を熟知していたためであろう。かくて三根氏は大正九年二月八日、土佐中学校の校長として着任し、翁に自己の抱負を述べた。人を見るのに明るい翁は、この良校長を得て、

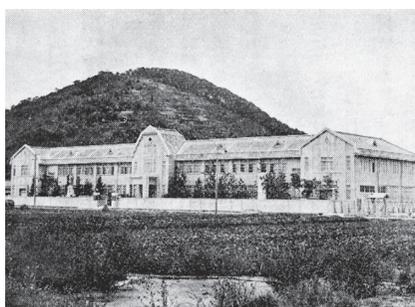
すっかり安心し流石は北川の推薦だ、万事委ねることが出来ると歎んだ。そして帯屋町にある川崎氏の控家を仮校舎に充て、同年四月十六日、翁および川崎氏等列席の上、本科入学式を挙げて、生徒二十八名に入学を許可し、直ちに授業を開始したのである。翌五月六日予科入学式を挙げて、第一学年十名、第二学年十五名に入学を許可して予科の授業を開始した。これが実は開校当初の状態で、英才教育に熱意を有する翁の面上には、人目にも判かる程の嬉し味と、緊張味が溢れていた。

## 五 創立時の熱意

土佐財界の両巨頭が、私財を投じて中学校を起こしたことは、全県下の精神界に非常な好印象を与えた。就中一市七郡の教育者は心からの感興を寄せた。この際宇田翁は他事を放つたらかして学校敷地の調査中であつて最初江ノ口に候補地を物色したとか、だが都合により潮江に変更し、大正九年十月同地に確定し、敷地五千二百七十七坪余の購入を了承し、大正十年二月十五日、埋め立て工事開始のため地鎮祭を行い、翌十六日より起工、同年八月新築工事に着手したのである。翁は最も熱心に創立の仕事に携わり、敷地の選定購入をはじめ、建築の様式及びその請負に至るまで、中心となつてグングン進捗させた。そして建築中も、益々熱心に諸工事を監督し他の理事をして、その真剣剣に舌を捲かせたほどであつた。

## 六 捌けた出資者

翁の天性か、また修養自得の結果か、そのいずれにもせよ、翁が当事者に全幅の信頼を払い自由を与えるその誠心、その度量は、土佐中学校の場合にも美事に発露されている。事業の草創時代には細大ことごとくこれを一身に引き受け



土佐中學校の全景

て、むしろ行き過ぎるほどの世話を焼いた翁は、事業が緒に着くとともに、一切を当事者に任せ切り、何事にも徹底した不干渉主義をとった。だから三根校長としても、思うままに自己の意見を行うことが出来、従って学校の成績が大いに挙げたのである。他と対照するとこの点がよく分かるが、竹内明太郎氏が私財を提供して工業学校を経営するや、必要に応じて、その都度金を出すという方法をとったものだから、校長などは窮屈を感じ、不便を感じた。そこになると、宇田翁のやり口は全然別で、金は全額を出しっ放し、経費は当事者の決定に一任という、伸縮自在の余地を与えて、ただその成績に留目したままでだ。出資者がかく捌け、かく碎けているから、剛直不屈の三根校長も感激して、全魂を打ち込む努力を払ったのである。

## 七 川崎氏の銅像

大正十年十一月九日、北川信従氏来校生徒のため有益な講話をなし、職員生徒一同と記念撮影をしたその翌日、川崎幾三郎氏が脳溢血で逝去された。そこで宇田翁は北川氏等と相計り、かねて当時の土佐銀行関係者によって、拠金し建設



川崎氏の銅像

しようとした川崎氏の銅像を、土佐中学校の構内に建設することにした。ここにも翁の川崎氏に対する美德が窺うかがわれている。

## 八 学校の財政

これより前、潮江校舎の新築工事に着手するや、予定の工事費では不足をきたすこととなり、翁と川崎氏が各々五万円ずつを出した。これで両氏の出資額は七十万円となった。そして川崎氏が逝去された時、その香奠料が十三万円あったから、翁は遺族川崎松子並びに川崎庄五郎氏に奨め、香奠料へ更に二万円を加え、都合十五万円を出資させた。よって総資金八十五万円に達したのであるが、内二十五万円の土地代、建築費を控除した正味六十万円が、基本資金となったわけだ。そこで翁はその六十万円を、翁の関係している高陽銀行に於いて、特に七朱五厘（七・五％）の利率で預かることにした。土佐中学校の経常費は年額三万円以上を要する計算となっているが、翁の計らいで四万五千円の利子が生まれる膳立となったから、三根校長をはじめ、学校当事者はますます翁の志に感激した。そして高陽銀行が四国銀行に合併してから後も、特に七朱の利子で預かってくれたから、学校の財政は相変らず裕福であった。

## 九 五大方針の実行

潮江の新校舎で、授業を開始する運びとなったのが大正十一年の陽春四月であった。これは校舎新築第一期工事の落成した直後で、第二期工事は四月一日に着手され、十月末日には早くも完成された。川崎幾三郎氏の銅像除幕式は、翁の発議により、学校の全貌がすっかり出来上がり、季節もちょうど菊花満開の十一月十九日を以て、いとも荘厳に挙行され、かくて開校記念碑の建設をみたのが大正十二年であった。これにおいて全国中等教育界の視聴を集めた土佐中学校の内容外観は、翁の用意と努力によって一切整備すると共に



土佐中学開校記念碑

- 一、個人指導に重きを置き、教授能率の増進を計ること
  - 一、天賦の能力を發揮し、自發的修養に努めさせること
  - 一、堅忍剛毅（忍耐力と強い意志）の性格、健実なる思想を養成すること
  - 一、責任を重んじ、好んで勞に就く習慣を養うこと
  - 一、運動を奨励し、養護上の注意を怠らず、以て体位の向上を計ること
- の五大方針が着々実行され始めたのである。

#### 開校記念碑

筆山の麓鏡川の畔校舎巍々（高々）として呶呶の聲（書を読む声）雲に響く是れ土佐中学校に非ずや  
教育振えば国家栄え教育振わざれば国家衰う 維新の際薩長土と並称せられて土佐より人材多く輩出し  
たりしは文に武に父兄の教育気分盛にして子弟の向上心盛なりしに因らずんばあらず 爾來（その後）  
教育振わず人材漸く凋落せんとす 川崎幾三郎宇田友四郎二氏大に慨する所あり巨財を投じて土佐中学  
校を創立大正九年四月より仮校舎にて授業を始め大正十一年十一月十八日本校舎の落成式を挙ぐ 茲に  
在校生の父兄相図り碑を建てて二氏の功を伝えんとす 善い哉挙や（何たる快挙） 父兄既に恩を知る  
子弟亦恩を知らざらんや 体を鍛え心を鍊り徳器を高くし智能を大にして国家に尽くすは二氏の恩に報  
ずる也 二氏の恩に報ずるは君国の恩に報ずる也

大正十二年一月

大町桂月撰

松村翠濤書

## 一〇 北川理事長の訃

大正十三年四月二十七日、理事長北川信從氏が逝去された。病名は胃がんであり、翁の別邸に於いて逝去された。北川氏と土佐中学校との関係は、理事長の役目そのものが一切を説明しておく。同三十日全校哀悼して靈柩を送った。同氏は東京に在って病を得、大正十二年十一月下旬、高知に於いて静養するため帰省した。友情に厚い翁は、心配しつつ棧橋に出迎えたが、蒼白の顔色に、痛々しい<sup>ぢや</sup>寝れを見せて、船橋を降りるにも危険を感じたので、翁は寄り添って手を貸そうとすると「有りがとう、それには及ばぬ」とニツコリ笑った。そしてひとまず親戚の家に落ちつき、適当な貸家を物色したが容易に見つからない。この事を伝え聞いた翁は「俺の別邸でよければ何時でも用立てる、遠慮はいらぬ」と、たびたび親切な言葉を寄せたので、北川氏は深くその友情を感謝し、間もなく此処に移り、何の気兼ねもなく寛いで、悠々療養につとめる事が出来た。この間における翁の心尽しは、好個の教育道話でありさすがに私財を投じて一個の中学校を建てた人だけであると、出入りの親族や昵懇者間の話題となった。北川氏も余程その好意を感銘したものと見え、遺言して家宝の岸駒と、大雅堂との六曲一双の屏風を翁に贈ったのであった。

## 一一 北川氏と翁

「友を見て其の人を識る」と云う聖人の言葉がある。宇田翁の至誠相許した友は近森虎治、藤崎朋之、北川信従、岡典章の四氏で、いずれも人格高潔、一識見を具えた非凡人である点において一致しており、また四氏共に申し合わせたように、名利に淡泊な人達である。ここにたまたま翁の真骨頂が浮き彫りにされているのではなからうか。左に翁の北川信従氏に対する追悼の辞を掲げる。

（北川と呼び切りにするのが、土佐流で親しみ深くもあるようだ。北川とは随分久しい交際で、大阪広島あたりの司法官時代から、ずっと相識っておるのだが、多くは県外での交際であり、土佐に帰っていた前後二三回の期間は引つくるめても甚だ短い。

長らくやっていた長崎市長を辞めて高知へ帰り、本町に仮住まいしていた頃には、死んだ藤崎（朋之）も元氣だったし、我々みんな同年で、その頃は未だ大分飲めていたのである。ところが晩年の北川は自分よりも早く酒と遠ざかり「一寸もいけぬ様になった」と言って、五、六杯も傾けると、真っ赤な顔をするのが不思議でならなかった。ところが自分も近年神経痛で医師からは、酒は毒だと制せられ、一年も止めておる間に、全く量がなくなり、北川よりも一層いけなくなったのは可笑しい。

それはさておき、北川という男は、若い頃から実に無慾恬淡な性格で、一番金儲けでもして、豪奢な真似をして見よ

うなど云う心は微塵もなく、死ぬまで困らず、人の助力を借りぬようにうまく暮して行けば、結構この上なしという風で、まことに足る事を知る風の男であった。

知事をやめて、東京三田小山町に頃合な邸宅を買入れ、死ぬ前の暮近くまで自適していたが、北川の事だから、要るだけの金はきれいに使ってしまった。殆んどまとまった貯蓄なんてものは無かった事と思うが、長崎市から贈られた慰労金や、何かで買ったように聞いている。当時物価がなにぶん安かったので、ほどなく好況時代に遭遇すると、その邸宅も相当高く評価されるようになった。淡泊で胸中をさらけ出す北川は「これで俺も売り食いにしても、どうやら死ぬ頃までは食いつなげそうじゃから安心した」などと冗談らしい、しかもほんとの事を言っていたのである。

そんな調子で、北川は正直、洒落、そして先輩知友いずれの前であるうと、己の思うところを吐露して、恐れ憚るところがなかったが、それが至って公平なものだから、長崎や栃木、新潟などで評判のよろしかったのも偶然ではない。長崎から帰って、高知で遊んでいた時分、ちょうど大隈内閣が出来た。知友が「北川お主も未だ遊んでいるのは惜しい、



北川信従氏

何かやれ、知事ならどうじゃ」と勧めた時「外の事は、もう飽き飽きしたが知事ならもう一度つとめに出ても悪くもない」と言った調子で、大石正巳氏から大浦内相に談じ込み、いよいよ起用されることになったのだが、我々がぜひ高知

へ連れて来ようと東京へ出向いて見ると「実は和歌山の方からも迎えが来ておる」と言う風で、引つ張り舩、結局引つ張り合いで、栃木へ行く事になったが、次いで新潟へ転じ、前後三年余りして勇退したのであった。

丁度、大隈内閣の下に、知事となったものだから、北川を憲政会系統のごとく見る者が多分にあるが、北川は決して政党人として動く男ではなく、地方の長としても、実に公平無私で功績を挙げ、それでこそ素晴らしい人気が寄つたのである。だから遊んでいるうち「代議士でもやって見ては」と勧めるものがあつても「俺は党人じゃない」とてんで相手にならず、しかし各党派の政策などについては、時々例の調子で、忌憚ない批評を下していた。

仙石氏など、最もよく北川の人物を理解している人で「北川のような男は土佐にはない」と惚れ込んでいた。友人であろうが、誰であろうが「お前のやろうとしている事は、あれはいかんよ」などと直言して憚らないところなど、我々は大いに徳として長く交際を続け、忠言により助けをかりたいと念じていたのに、天命はまことに致し方がないことだ。

加えて、北川が一面非常に親切で、他界するまでに面倒を見てやり、世話をした人は随分多く、窮している者を見ては、有り無しの身銭を投げ出してまでも、救ってやったりしたのだが、ここにはただ追憶感想の一端を記すに止める。勿論右は、土佐中学校理事長としての北川氏を悼んだ言葉ではないけれども、ここに掲げて不都合はあるまい。北川氏の霊がこれを知ることがあれば、知己の言として、かならず満足しているであろう。

## 一二 向陽会の生誕

大正十三年五月、上級生が主体となり、向陽会と称する自治修養会が設けられ、その実践躬行の決議事項中に、毎年一回、一同、創立者故川崎幾三郎氏の墓を弔い、報恩の念を堅めさせるとの一項目がある。報恩は宇田翁の最も強調する実践倫理で、翁は常に身を以てその範を示されておる。一例を挙げれば、川崎氏が永眠されるや、翁は恭々しく其の柩前にぬかずき、あたかも生ける川崎氏に対すると同様の言語動作を以て、多年の恩義を謝し、併せて報恩の実を行為の上に現わし、遺族達を感激させたとの美談が伝えられた。翁は後進に対して、報恩を勸奨した。向陽会がこの美徳の高揚に努めたのは、全く翁の精神に副うことを期しての事である。

## 一三 土佐中の誇り

土佐中は、英才教育を主眼とし、上級学校の予備門の観があるので、ややもすれば世間から智育偏重の誤解を受け易かった。翁は体育の奨励者で運動の際は裸体を奨励し、九月初め黒ン坊会にて其の等級を表彰するという体育方針には大賛成であった。この体育奨励の結果、土佐中は全国および県下中学校に比し、身体検査の成績は断然優秀で、身長、

体重、胸囲揃って抜群の数字を示しており、これが本校の最も大なる誇りとなった。

#### 一四 徹底せる同情心

数多き美德中、思いやりが深く、且つ周到なることが、たまたま校長三根氏の清貧と関連して、うらかな話題の種となった。同校長が就任後四五年を経た頃だった。ある日翁から理事の川島氏に電話がかかり、会いたいとの事だから、早速出向いたところ、

聞けば、校長は大分借金が嵩み、利子だけでも相当要るらしい。よほど困っておられるそうで、まことに気の毒に思う。学校の資金の中から融通し、薄利で始末方をする方が、校長もややこしくなくてよからうから、此の件を心配して貰いたい

との話であった。そこで川島理事が三根氏について訊いたところ、借金の額は五千五百円、それが皆な高利で難儀している事情が判明したから、氏は翁の意志を体し、資金の中から其の金を用立てた。昭和十年三月に三根校長が逝去されるや、翁は見舞金として一万五千五百円を贈呈し、遺族の者を感激させた。遺族はこの金の中から五千五百円を学校の会計に返した。翁の周到な用意と、その徹底した同情振りがここにも露われている。

## 一五 高遠の理想

三根校長の述懐に

北川信從氏は、学校創立の際、余に向つて云う様「土佐は不思議にも、古来天才、奇才を出すことが少なくないと思う。それで教育のしようによつては、先人に劣らぬ偉人を輩出せしめる事が出来ると思うから、しっかりとつて貰いたい」との希望であつた。この一言は余をして、責任の大なるを痛感せしめた云々

とある。この片言隻語へんげんせきごに明らかなる如く、土佐中学校の理想は、大人物を養成して、その活動によつて維新前後の華やかなる土佐に復活せしめると云うのであつて、翁の高遠なる意見がまたこの中に織り込まれている。であるから創業時代の土佐中は、確かに人材輩出の登龍門たる実を挙げ、上級学校入学の成績は文字通り百パーセントであつた。県官民諸賢は翁が本県教育上に印したその足跡と、その功績を仔細に検討し、翁の高遠なる理想を篤と認識すべきであらう。

昭和十四年九月三十日發行

著者兼發行人 高知市本町八十番地

土佐電気株式会社内

宇田翁伝記刊行会

代表者

下元 鹿之助

常務委員

川島 正件

下元 鹿之助